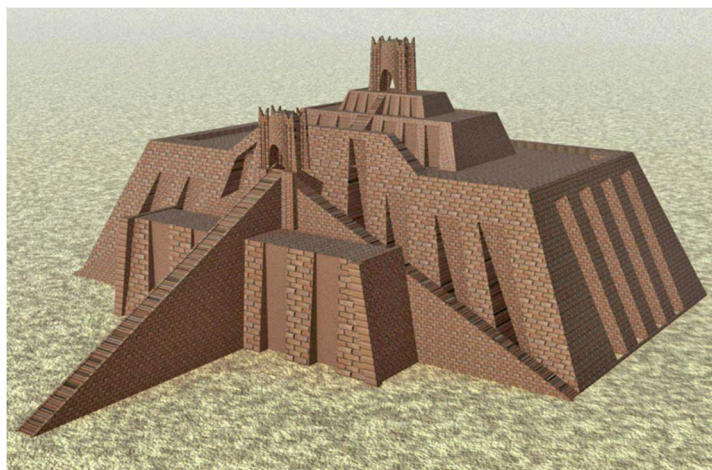


アブラハムの物語 (1)

アブラハムとサラの物語は大変長いので、複数回に分けることにします。アブラハムが語るのに耳を傾けることが中心になりますが、ある箇所ではサラの言葉にも耳を傾けることにしましょう。後にアブラハムは「信仰の父」と呼ばれるようになり、新約聖書の中でも「我らの父アブラハム」(ルカ 1:73)、「父アブラハムよ」(ルカ 16:24)といった表現が出て来ます。＜聖書協会共同訳(2018)＞はローマの信徒への手紙 4:1～12 に「信仰の父アブラハム」という中見出しを付けています。しかし彼が決して完璧な人ではなかつことは、やがて物語の中で明らかになるでしょう。それでもなおアブラハムの生涯の物語は、人間の現実と神の救いを深く考えさせるものがあるように思われます。

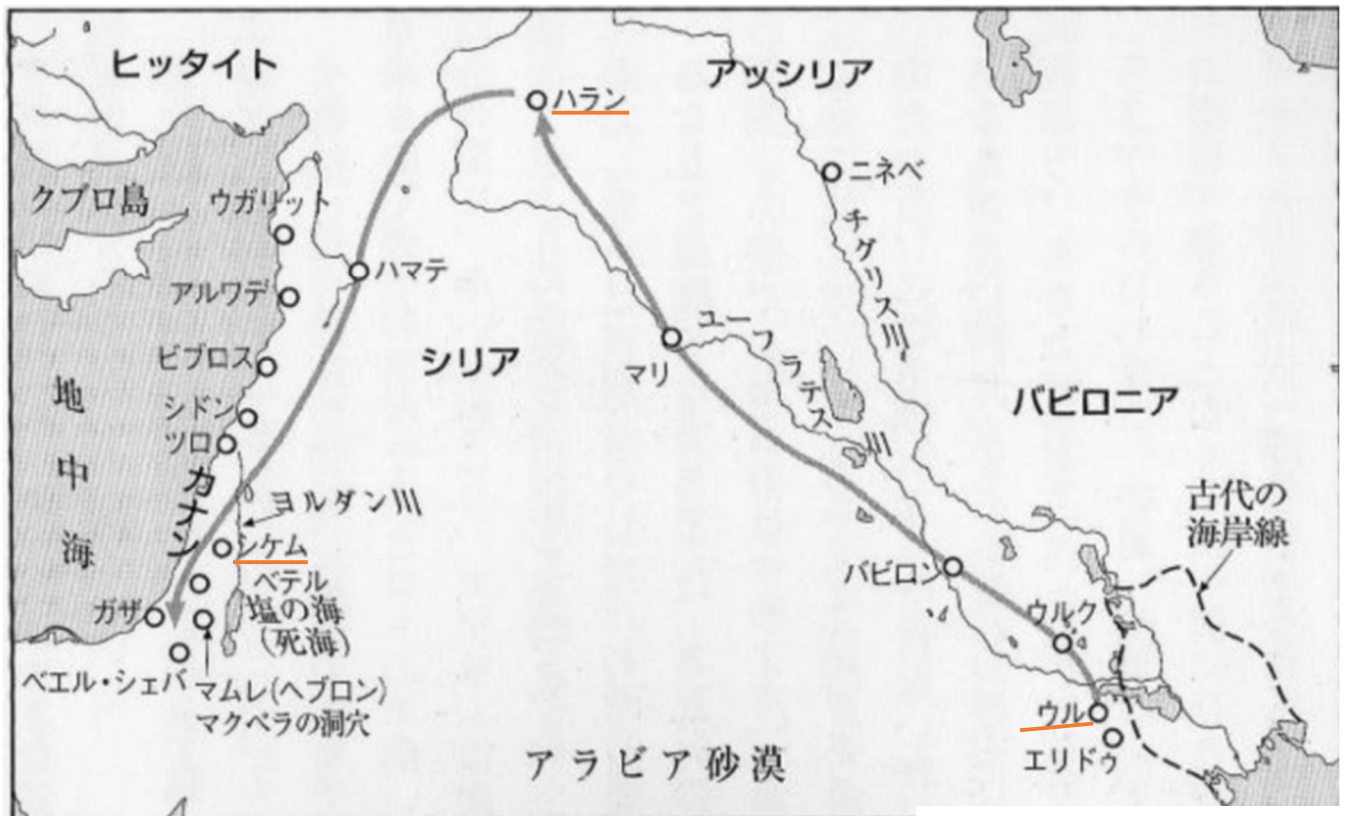
アブラムの出発

わたしたちの一族は、ユーフラテス川がペルシャ湾に注ぐ河口の近く、文明の発祥地とも言われるカルデアのウルという都市に住んでいました。ここには水道設備もあり、家具・調度品の類いもあって、考えてみればわたしたちはとても便利な生活をしていました。町には「ジググラト」と呼ばれる大きな塔があって、それが宗教と生活の中心をなしていました。



ウルのジググラト(聖なる塔)。ここには月の神ナンナルを拝む至聖所があった。

しかしわたしの父テラは、ウルの生活に何か耐えられないものを感じたのでしょうか。わたしアブラム(後のアブラハム)と、わたしの妻サライ(後のサラ)と、わたしにとっては甥にあたる孫のロトと、それに奴隷たちを連れてウルを去り、ユーフラテス川に沿ってカナン(今のパレスチナ)の地に向かいました。シリア北部のハラン(現在はトルコ領)に至ってしばらくはそこに滞在したのですが、やがてそこで父は亡くなり、その後の責任はわたしに委ねられることになりました。



『図説 聖書物語 旧約篇』

ハラシまで父に従ってきたのですが、わたしの中にも何か強くわたしを促すものがありました。どうしても目的地目指して進まなければならない、カルデアのウルで拝んでいたものとは違う何か自分が呼んでいるという意識がありました。実を言うと、ウルで暮らしていたときから、ずっとそのような内的促しがあったのです。

そしてハラシ滞在中に、わたしははっきりと何ものかの声を心に聞いたのです。

「あなたは生まれた地と親族、父の家を離れ／私が示す地に行きなさい。

私はあなたを大いなる国民とし、祝福し／あなたの名を大いなるものとする。

あなたは祝福の基となる。

あなたを祝福する人を私は祝福し／あなたを呪う人を私は呪う。

地上のすべての氏族は／あなたによって祝福される。」 創世記 12:1-3

こうわたしに呼びかけた方を、わたしは「主」(ヤハウェ)なる神と信じました。わたしは血のつながった人々から独立し、ただこのように呼びかけた方のみを信じて出発することを決意しました。主がわたしを祝福してくださる。と同時に、わたしをとおして主の祝福はあらゆる氏族に広まっていく、と言われます。その意味を十分に理解できたとは言えませんが、自分には厳粛な使命が与えられていることを受けとめました。

わたしはそのとき 75 歳でした。わたしは妻のサライ、甥のロトを連れ、蓄えた財産とハランで加えた人々を伴ってカナンに向けて出発しました。

主の名を呼ぶ

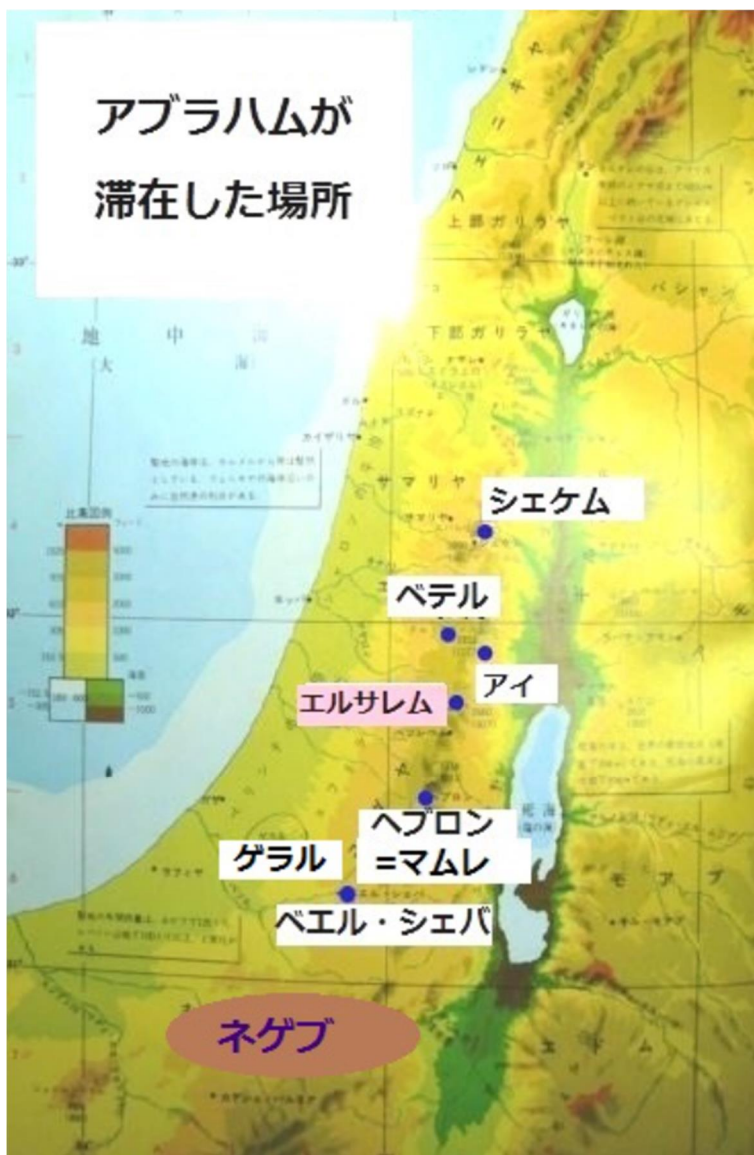
わたしたちは道を南にとり、やがてカナンのシェケムという所に来ました。そこには「モレの櫛の木」と呼ばれる聖所がありました。あたり一帯には先住のカナン人が暮らしています。言葉も習慣も違う人々です。わたしたちは、自分たちが拠り所を持たない旅人であり寄留者であることをあらためて思わないわけにはいきませんでした。未知の土地で異民族に囲まれている自分たち。不安が襲ってきます。そのとき、主がわたしに現れてこう言われました。

「私はあなたの子孫にこの地
を与える。」創世記 12:7

主の言葉によって平安と希望が与えられました。主こそがわたしの拠り所なのです。わたしは自分に現れてくださった主のために祭壇を築いて、真剣に礼拝しました。この方を信じ、この方に従って行くしか生きる道はありません。

わたしたちは南へ進んでベテルの東の山地に移り、そこに天幕を張りました。わたしはここにも主のための祭壇を築き、主の名を呼びました。主の名を呼んで礼拝することが生活の基本でした。

わたしたちはさらに南へと旅を続け、ネゲブへと移って行きました。



銘形秀則牧師の HP から
<https://meigata-bokushin.secret.jp/>

エジプト滞在

ネゲブにいる間に飢饉が起きました。飢饉はひどく、このままでは飢え死にする危険を感じました。そこで食べ物が豊富と聞いているエジプトに行くことにしました。

その際、ひとつとても心配なことがありました。それは



妻のサライが非常に美しいので、エジプト人がサライを奪って自分を殺す **エジプトの壁画** のではないかと、ということでした。そこでわたしはサライにこう頼みました。

「あなたは、自分のことを私の妹だと言ってほしいのだ。そうすれば、あなたのお陰で私は手厚くもてなされ、命は助かるだろう。」 12:13

これは名案だと自分でも思いました。なぜなら、事実サライは腹違いの妹でもあったので、嘘をつくことにはならないからです。

予想は的中しました。サライが美しいことはエジプトのファラオ（王の称号）に知られ、宮廷に召し入れられました。わたしは彼女の兄だということで手厚くもてなされ、ファラオから羊、牛、ろば、らくだ、それに男女の奴隷などを与えられました。サライのことは心配でしたが、これ以外に助かる方法はなかったのだと、自分に言い聞かせました。

ところが主はこれを許されませんでした。主はファラオとその宮廷に恐ろしい災いを下されました。サライがわたしの妻であることは露見し、ファラオはわたしを呼びつけて詰問しました。

「あなたは何ということをしたのか。なぜ、彼女が妻であると告げなかったのか。なぜ、彼女を妹であると言ったのか。だからこそ私は彼女を妻として召し入れたのだ。さあ今すぐ、あなたの妻を連れて行きなさい。」 12:18-19

わたしは罰を受けるかと思ったのですが、ファラオは主を恐れたらしく、贈り物などはそのまま持たせて、わたしたちを立ち去らせました。こうして窮地を脱して、わたしたちはエジプトを去り、ネゲブのほうへと戻って行きました。

サライは無事に戻ったのですが、ほとんど口をきいてくれませんでした。わたしは後ろめたいものを感じました。自分の身を守るためにサライを犠牲にしたことを、次第に後悔するようになりました。思えば、カナンの地では祭壇を築いて主の名を呼んでいたのに、エジプトではそれを忘れて怠りました。ファラオが受けた主からの災いは、本来自分が受けるべきものだったのではないか。エジプトで自分はたくさんの家畜や金銀の財産を得たけれども、このままでは自分は危ういのではないかという思いが去りませんでした。

(サライの思い)

あのように恐ろしい思いをしたことはほかにありません。アブラムはわたしを放り出し、わたしは危うくファラオのものになるころでした。ぎりぎりのところでファラオが激しい腹痛を起こし、宮廷中の人々が同じようになって、これは大きな間違いだと感じてくれたから助かったのです。アブラムが礼拝する主なる神さまが、わたしを守ってくださったのです。

エジプトに入るとき、夫アブラムはわたしにこう言ったのです。

「あなたは、自分のことを私の妹だと言ってほしいのだ。そうすれば、あなたのお陰で私は手厚くもてなされ、命は助かるだろう。」

この人は自分が助かれば、自分の利益になれば、わたしなどどうなってもよい、というのでしょうか。わたしはその時は黙って従いましたが、これほどひどいことはありません。

わたしたちはカルデアのウル以来、長く苦勞と喜びを共にしてきた夫婦ではありませんか。アブラムと呼ばれた主は、彼と一体のものとしてわたしと呼ばれたと信じています。そのわたしを捨て去って、どうして主の祝福があるのでしょうか。

夫がしたことはわたしに対する裏切りであり、同時に主への背きです。彼が守ろうとしなかったわたしを、主が守ってくださいました。

主よ、彼を悔い改めさせてください。わたしたちの関係は破れたままです。これを癒やすことができるのはあなただけです。……

(このあと、ふたたびアブラムの語りになります。)

ロトとの別れ

わたしたちはネゲブからさらに北に進み、以前に天幕を張ったベテルの東に至りました。そしてわたしが初めに祭壇を造った場所に行き、主の名を呼びました。わたしはエジプトでの過ちを悔いて、主の前で再出発を誓ったのです。

前にも触れましたが、一行の中にはわたしの甥のロトがいました。ロトの父でありわたしの兄弟であるハランは早くに亡くなったため、そしてわたしたちには子どもがなかったこともあって、ロトをわが子のように慈しんできたのです。

けれども今ではロトは成人して久しく、わたしとは別に自分の家畜とそれを飼う者を多数所有していました。ロトの家畜を飼う者とわたしの家畜を飼う者との間に、しばしば争いが起こりました。土地が狭かったからです。それでわたしはロトに言いました。

「私たちは親類どうしなのだから、私とあなた、また私の家畜を飼う者たちと、あなたの家畜を飼う者たちとの間で争い事がないようにしたい。あなたの前には広大な土地が広がっているではないか。さあ私と別れて行きなさい。あなたが左にと言うなら、私は右に行こう。あなたが右にと言うなら、私は左に行こう。」 13:8-9

エジプトでの過ちの反省から、わたしは自分の損得で事を決めるのではなく、ロトに選択権を譲ったのです。ロトは、よく潤って豊かに見えるヨルダンの低地を選んで東に移って行きました。後から考えれば、これはロトの不幸の始まりでした。低地に移ったロトは、やがて悪名高いソドムに住むことになったのです。これについてはまた後で触れることにします。

長年共に歩んだ愛するロトと別れた喪失感は、小さいものではありませんでした。またロトの選択の結果、わたしたちが生きて行くことになったのは、痩せた土地です。わたしは茫然としてうつむいていました。その時です。主の語りかけが聞こえました。

「さあ、あなたは自分が今いる所から北、南、東、西を見回してみなさい。見渡すかぎりの地を、私はあなたとあなたの子孫に末永く与えよう。私はあなたの子孫を地の塵のように多くする。もし人が地の塵を数えることができるなら、あなたの子孫も数えることができるだろう。さあ、その地を自由に歩き回ってみなさい。私はその地をあなたに与えよう。」 13:14-17

わたしは主によって励まされ、希望をもって目を上げました。目の前に広がる土地は、

神が祝福をもってわたしを生かしてくださる土地なのです。

わたしは天幕を移し、ヘブロンにあるmamレの櫛の木のそばに住んで、そこに主のための祭壇を築きました。主なる神にまっすぐに向かい、その導きのもとに生きていくことをあらためて決心したのです。



ヘブロン

ロトの救出

思いもかけず、戦争に巻き込まれることになりました。チグリス・ユーフラテス川のかなた、エラムの国のケドルラオメルを盟主とする連合軍が、死海のほとりの町々を攻撃してきたのです。死海のほとりのソドム、ゴモラを含む五つ町の同盟軍は、ケドルラオメルを盟主とする連合軍にたちまち圧倒されて敗北を喫し、財産や食糧はすべて奪い去られるという事態となりました。

そうした中、ソドムに住むわたしの甥のロトが敵に捕らえられた、という知らせが届きました。ロトを救出しなければなりません。わたしは訓練のできている僕たち 318 名を集めて、北の方へるかダマスコの向こうまで敵を追跡しました。そしてロトとその家の人びとと財産、さらにはソドムなど同盟の町々の財産まで取り返して、戻ってきたのでした。奇跡的大勝利でした。

こうしてわたしはしばらくは興奮に包まれていたのですが、やがてそれが静まると、不安と葛藤をおぼえるようになりました。これまで異民族の中でかろうじて生きてきた。それなりの財産も築き、このたびの戦争では勝利を収めてロトとその財産を取り戻した。しかしいつまた何が起こるかわかりません。それを思うと恐れが去りません。それに、わたしはずっと心に苦しみを抱えていました。それは自分の跡継ぎが与えられない、ということでした。そのことは口にはしないまでも将来への不安となり、また神に対するわだかまりとなっていました。

恐れるな、アブラムよ

神は沈黙しておられ、このまま自分は異国で生涯を閉じるのではないか。心が晴れない日が続きました。

しかしやがて神は、長い沈黙を破ってわたしに語りかけられました。

「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きい。」 15:1

しばしば恐れに苦しむわたしに対して神は、「恐れるな、アブラムよ」と言われます。

「わたしはあなたの盾である」あなたの盾となってあなたを守る、と主は言われるのです。わたしは心のうちにあるわだかまりを神に訴えました。

「主なる神よ。私に何をくださるといいますか。私には子どもがいませんのに。家の跡継ぎはダマスコのエリエゼルです。あなたは私に子孫を与えてくださいませんでした。ですから家の僕が跡を継ぐのです。」 15:2-3

すると主の言葉がありました。

「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなた自身から生まれる者が跡を継ぐ。」

15:4

主はわたしを天幕の外に連れ出されました。満天の星でした。わたしは天を仰いで星々を見つめました。星の光はわたしの心の奥底に差し込んでくるようでした。

主は言われました。

「天を見上げて、星を数えることができるなら、数えてみなさい。」

「あなたの子孫はこのようになる。」 15:5

わたしは主を信じました。何がどうであろうと、わたしに語りかけ、盾となってわたしを守ってくださる主なる神がおられる。この方に過去も現在も将来も、一切を委ねました。主はそれを大きく肯定し、うなずいてくださいました。

信じることの平安の中でわたしは深く呼吸しました。主の声に従ってハランを出発してから5年。わたしは80歳となっていました。

(つづく)

(2022/11/30 井田 泉)